

アトモスフィア

生化学会と分子生物学会の統合を望む

上代 淑人*

本年6月に第20回国際生化学・分子生物学会 (IUBMB) コンgressが日本生化学会大会と日本分子生物学会も合同する形で京都において開催され、9,200名を超える参加者を得て成功裡に終了した。これには、生化学会と分子生物学会が一致協力したことが、大きな推進力となっている。両学会の大会・年會を合同で開催する試みはこれまでもあり、1996年に第69回日本生化学会大会と第19回日本分子生物学会年會の合同年會が札幌で大塚栄子を組織委員長として開催された。しかし、残念なことに、それ以後10年間両学会が合同で年大會を開催することはなかった。

今回の上記コンgressを期にして、再び両学会の年大會を合同で開催しようという気運が生じている。2007年度は日本生化学会大会 (会頭：清水孝雄) と日本分子生物学会年會 (年会長：山本雅) が合同で開催される予定であり、その次の2008年には長田重一と大隈良典により合同年會が開かれる予定ときいている。その辺になると、どちらがどちらの会頭・年会長かがわからない。そもそも生化学と分子生物学は同一の学問であり、年大會は同じひと達の集まりなのである。IUBMBは、かつてはIUB (International Union of Biochemistry, 国際生化学連合) と呼ばれた組織であるが、現在はIUBMBに改称されている。国際的に見ても生化学会と分子生物学会という2つの学会をもっているのは日本だけである。そもそも何故わが国だけが2つの学会をもっているのだろうか？

日本生化学会は1925年に柿内三郎らによって設立された。1922年初めから東京で柿内を中心として開かれていた「生化学者宵の會」がその母体となっている。当時、医学部では生理学の流れをくむ生理化学と医化学、理学部では有機化学から派生した生物化学、農学部では農芸化学といった講座名が用いられていたが、柿内はその持論である学部撤廃論から、広く生命現象を化学的に究明する学問として「生化学」の名称を案出したのである。彼の高見によって、日本生化学会は医、理、農、薬の広範囲の生化学者を糾合して民主的に運営されてきた。事務組織も社団法人として運営されている。

一方、1953年のWatsonとCrickのDNA 2重らせん構造の発見の前後から、生物の分子レベルでの研究が盛んになった。生命現象を分子レベルで明らかにできるようになったことに驚嘆の意を含めて「分子生物学」という新しい名称が用いられるようになった。医学の分野でもPaulingとItanoの鎌状貧血症でのヘモグロビン β 鎖異常の発見から「分子病」という新しい概念が提唱された。後年わが国でも、特に遺伝子の機能の研究に興味をもつ気鋭の研究者らが、渡辺格らを中心として、「八王子セミナー」を開催した。この少数での活気にみちた泊り込み討論集會は我々にとって極めて魅力的であり、新鮮であった。これが当時すでにマンモス化していた生化学会に飽き足らなかった若手集団による「日本分子生物学会」の設立となったのである。

しかし、本当に2つの学会を作る必要があったのだろうか？ 新学会の設立をめぐる討論集會が宮島で開催されたとき、私は反対意見を述べたが、それは少数派であった。私はその年にアメリカ生化学会の会長にPaul Bergが選出されたことを挙げ、むしろ日本生化学会を改革することにより学会はひとつとし、八王子セミナーはGordon Research Conferencesのように限定された分野で、少数の白熱した討論のできる場として持続することを提案した。

今日になってみると、日本分子生物学会も拡大の道を辿り、会員数1万人を超え演題数も5000に達し、生化学会と分子生物学会との運営の様式にはほとんど差がなくなってきた。2つの独立した巨大会の年大會が、2カ月位の間に開催され、シンポジウム、ポスターでも本質的には同じようなテーマが並んでいる。両学会と関係をもつ研究者にとっては誠に迷惑至極である。何故に国内で2つの同じような学会がなければならないのか、そして両者が似たような大会・年會を開催しなくてはならないのかと疑問に思う。

両者の年大會では正直に言って分子生物学会の方が若手が多く熱気がこもっている。それには、いくつかの理由があろうが、ひとつには分子生物学会の方が会費が安く、若者が入会しやすいということがある。その点で本誌10月号に公示された「会費の値下げ」は長田・前会長、宮島篤会長の英断である。私はさらにその次のステップとして両学会の統合をよびかけた。無論、反対意見もあるだろうが、指導的な立場にある方は、小異を捨て大同に就くという精神で対処して頂きたい。世界各国の生化学会がすべて生化学・分子生物学会と改称している中で、わが国だけが2つの学会に固執する理由は全くないのである。忘れてはならないのは学会は会員のためにあるということである。(文中敬称略)

*本会名誉会員、東京大学名誉教授、京都大学医学研究科特任教授